

研究主題 小学校国語科における思考力・判断力・表現力の育成について
～単元を貫く言語活動を設定した説明的な文章の指導の在り方～

要約：金沢市児童は国語科において「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」が十分でないことが全国学力・学習状況調査の結果より明らかになった。その能力を高めるためには説明的な文章教材において単元を貫く言語活動を設定し、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ことが有効であると仮説を立てた。授業で検証した結果、児童の意欲が向上し、「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」の高まりが確認できた。

キーワード：思考力・判断力・表現力，説明的な文章教材，単元を貫く言語活動

I 研究の背景

平成 24・25 年度全国学力・学習状況調査の国語科において、金沢市の児童は「連続型テキストや非連続型テキストから必要な情報を読み取って自分の考えを書く力」つまり「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」が十分に身につけていないことが分かった。その力を「文章の読み方・書き方といった基礎的な知識・技能を課題解決に活用できる力」であると捉え、本研究における「思考力・判断力・表現力」と定義した。

文献や実践資料を分析した結果、その能力を高めるためには、「単元を貫く言語活動」を設定した説明的な文章教材において、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ことが有効であると仮説を立てた。

「読むこと」における単元を貫く言語活動について文部科学省は、「無目的に場面ごと、段落ごとに平板に読み取らせる指導を改善することが求められる。すなわち、児童自身にとっての読む目的を明確にして本や文章を選んだり、目的に応じて内容を的確にとらえたり、自分の考えをまとめて交流したりする（中略）」と説明している。

この単元を貫く言語活動を根底に据え、児童の国語力の向上を図るために研究に至った。

II 研究の目的

単元を貫く言語活動設定した説明的な文章教材において「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせて」いくことで、思考力・判断力・表現力が育成できるか、また、その基盤となる学習意欲が向上するかどうかを、授業を通して検証し、考察する。

III 研究の方法

本研究の検証は以下の方法で行った。

1. 研究の対象となる教材の選定
2. 変化を見取るテスト、アンケートの作成
3. 授業、テスト、アンケート結果の考察

IV 研究の結果

1. 研究の対象となる教材の抽出

文献や実践資料より、単元を貫く言語活動が比較的設定しやすい説明的な文章教材である、4年生の「アップとルーズで伝える」と6年生の「『鳥獣戯画』を読む」を抽出した。

2. 変化を見取るテスト、アンケートの作成

読む力の変化を見取るテストの問題として、PISA 調査や平成 24・25 年度全国学力・学習状況調査より「A 文種判断，B キーワード発見，C 要約，D 想像，E 比較，F 細かい関連付け，G 広い関連付け，H 推論，I 内容批評，J 表現批評」

の 10 項目を抽出した。また、意欲面の変化を見取るアンケートも作成した。

これらのテストやアンケートを本研究の対象学級と金沢市内の他の小学校 4 年生、6 年生で実施し、比較できるようにした。

3. 授業、テスト、アンケート結果の考察

まず 4 年生における説明的な文章教材「アップとルーズで伝える」と言語活動教材「リーフレットによる『便利グッズ』の紹介」で、単元を貫く言語活動を設定した授業を行った。

その際に「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ために「分かりやすさ発見！べしべしシート」という自作ワークシートを用いた。

単元を貫く意識

「アップとルーズで伝える」から見つけた「分かりやすい説明の工夫」を使って、「生活便利グッズ リーフレット」を分かりやすく作ろう。

第一次（単元の見通しを持つ）

「生活便利グッズ リーフレット」を作って、便利グッズを紹介しよう。そのために「アップとルーズで伝える」から「分かりやすい説明の工夫」を読み取ろう。

第二次（読む目的を明確にした読み取り）

「アップとルーズで伝える」から「分かりやすい説明の工夫」を読み取り、「分かりやすさ発見！べしべしシート」にまとめていこう。

第三次（知識・技能を活用する言語活動）

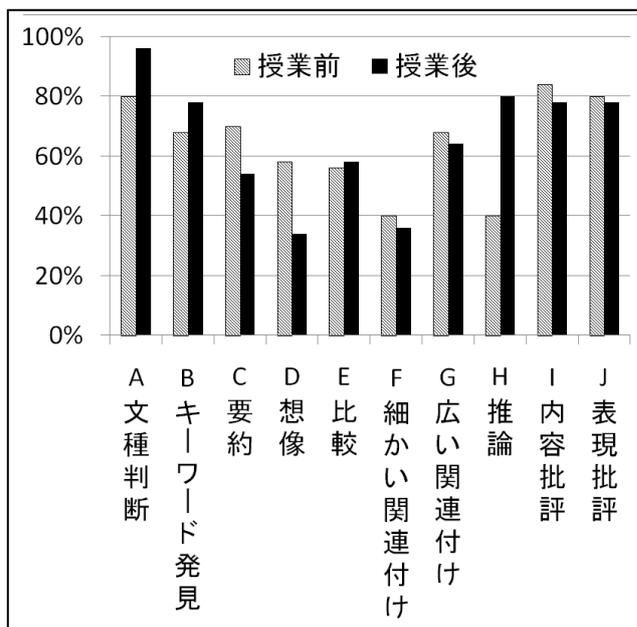
「分かりやすさ発見！べしべしシート」をもとにして、「生活便利グッズ リーフレット」を分かりやすく作ろう。

図表 1 単元を貫く言語活動を設定した単元構成

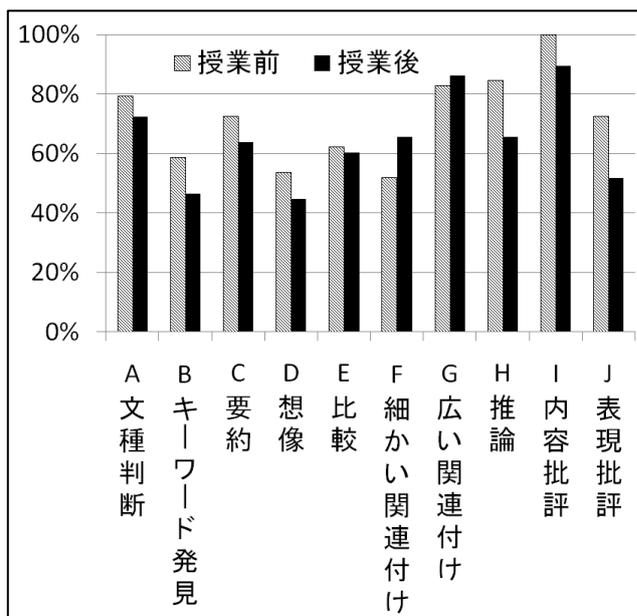
児童は「アップとルーズで伝える」から「読む人に呼びかけるべし、具体例を入れるべし、『このように』でまとめるべし」等、分かりやすい説明の工夫を読み取っていった。それらを一覧にまとめ、活用しながら「生活便利グッズ リーフレット」を書いていった。

その結果、読む能力の変化を見取るテストの他

校との比較で「A 文種判断、B キーワード発見、H 推論、J 表現批評」に顕著な差が見られた。



図表 2 本研究対象学級のテスト結果



図表 3 他校のテスト結果

特に「H 推論」の問題は他校では 18%下がったが、本研究対象学級では 40%上昇した。問題内容は本文の「要旨」を推論するものであった。授業の中で分かりやすい説明の工夫を見つける際に筆者の主張が「このように」とまとめる段落があると学習したことが効果的であったと考える。

また「J 表現批評」の項目が他校は 51%の正答率なのに対し、本実践の対象クラスは 78%の正答率であった。問題内容は本文の表現の工夫を問う

ものであった。実践した授業の中で「分かりやすい説明の工夫」を読み取っていたためと考える。

また、リーフレット作りの際に「読む人によびかける書き方」、「具体例を入れる書き方」、「このように」でまとめる書き方など、形式面での工夫についてどの児童も活用できていた。

意欲面でのアンケート結果も、「国語が好きか」という問いに対し、「どちらかというと思わない」の項目の児童はいなくなり、「とてもそう思う」の児童が30%から60%に上昇した。

これらの4年生の実践より『読むこと』『書くこと』に活用できる力の高まりや意欲面での高まりを確認することができた。

次に6年生における説明的な文章教材『鳥獣戯画』を読むと絵の評論文を書く言語活動教材「この絵、わたしはこう見る」の実践を述べる。

その際に自作ワークシートである「技あり！表現テクニックシート」を用いた。

単元を貫く意識

『鳥獣戯画』を読むから見つけた「技あり！表現テクニック集」を使って「評論文」を書き、展示会をしよう。

第一次（単元の見通しを持つ）

「評論文」を書いて、展示会をしよう。そのために『鳥獣戯画』を読むから「表現テクニック」を読み取ろう。

第二次（読む目的を明確にした読み取り）

『鳥獣戯画』を読むから「表現テクニック」を読み取り、「技あり！表現テクニックシート」にまとめていこう。

第三次（知識・技能を活用する言語活動）

「技あり！表現テクニックシート」をもとにして、「評論文」を上手に書こう。

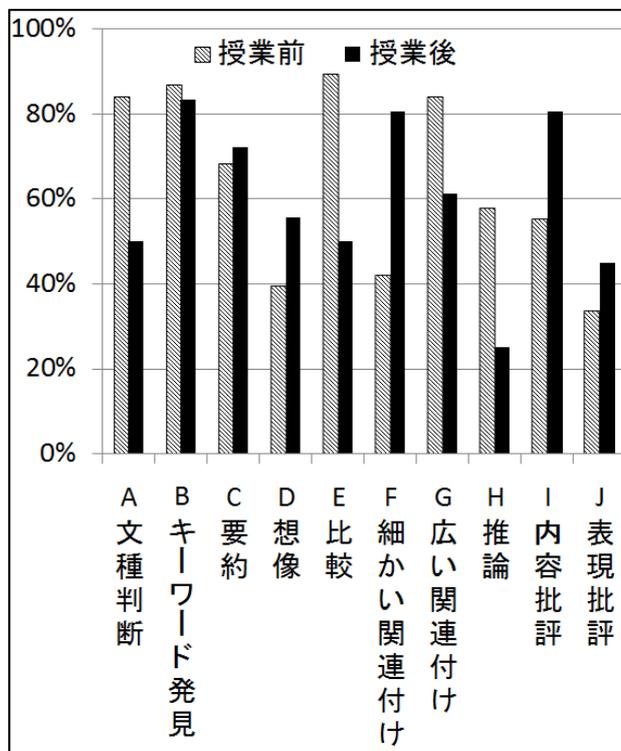
図表4 単元を貫く言語活動を設定した単元構成

児童は『鳥獣戯画』を読むから「書き出しの工夫、実況中継のような書き方、ダッシュ、体言止め、比喩、場面を想像して書く」等の表現の工夫を見つけていった。

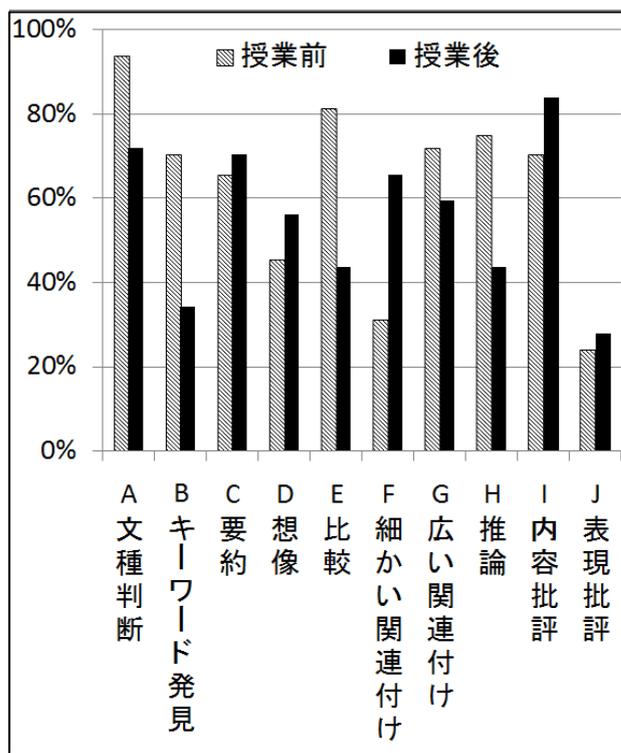
それらをまとめ、活用しながら評論文を書いていった。書きあがった評論文について、同じ絵を

選んだ児童同士読み合い、アドバイスし合った。修正した後、「アートストリート」と名付けて絵と共に廊下に掲示した。

実践の結果、読む能力の変化を見取るテストの「B キーワード発見」において顕著な差が見られた。



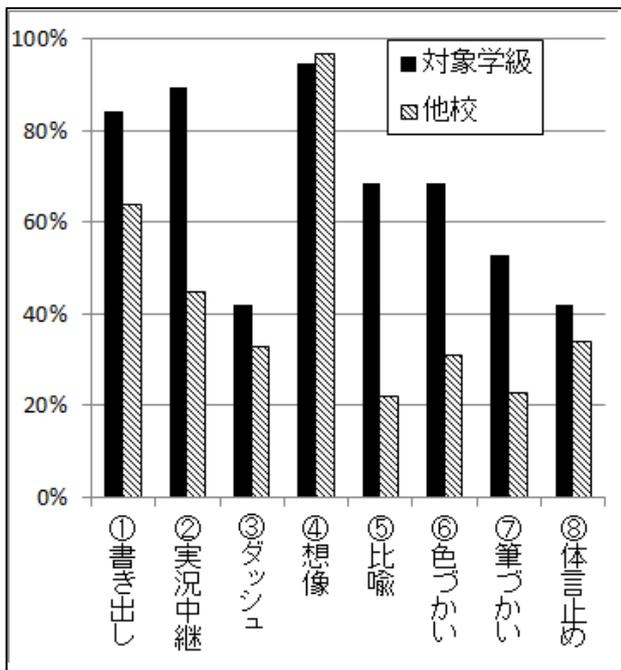
図表5 本研究対象学級のテスト結果



図表6 他校のテスト結果

「B キーワード発見」は、他校は34%の正答率なのに対し、本実践の対象クラスは83%の正答率であった。この問題内容は問題提起の文を書き出すものである。表現テクニックを見つける授業において文という単位の認識や「～だろうか。」という疑問の言葉に着目する言語感覚が高まったためと考える。

また絵の評論文を書いた際には、①書き出しの工夫や⑤比喻等の表現テクニックを用いて書かれてあるものが他校と比べて多かった。



図表7 表現テクニックの使用割合の比較

なお、他校の評論文は、金沢市内の小学校6校を対象に100名分を分析したものである。それらの担任の教師は、『鳥獣戯画』を読み取った後、その表現を生かして評論文を書く言語活動を行っているが、本実践の「技あり！表現テクニックシート」のように「言語活動につながりを持たせる」ためのワークシートは作成していない。

意欲面でのアンケート結果も、「国語が好きか」という問いに対し、「少しそう思う」の項目児童はいなくなり、「とてもそう思う」の児童が26%から57%に上昇した。

授業後にはふりかえりの文章を書く活動を毎時間行った。その中には、次のような意欲面に関する記述が見られた。

- ・書き出しやダッシュや実況中継のようなテクニックを使った評論文を書くのが楽しみです。
- ・体言止めを使うと分かりやすかつこい文章が書けると思う。だから評論文に使ってみたい。

図表8 児童の授業のふりかえり

これらの感想より、第三次の言語活動を設定し、第一次で言語活動を行う見通しを持たせておくことが意欲の高まりにつながる事が分かった。

以上、6年生の実践より『読むこと』を『書くこと』に活用できる力の高まりや意欲面での高まりを確認することができた。

V 研究の成果と課題

成果として、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ためのワークシートや単元を貫く言語活動を設定した綿密な単元構成により、思考力・判断力・表現力を育成できることが分かった。

また、単元を貫く言語活動の特性として、文章を「目的」を持って読むことと、第三次の言語活動を最終目的として設定することにより、意欲面での高まりが確認できた。学習意欲は思考力・判断力・表現力を高める基盤である。単元を貫く言語の有効性が実証できたと考える。

課題として、実践において文章技巧重視の授業になってしまった点が挙げられる。一番大切なのは自分の思いを「伝えたい」という意欲である。文章技巧は伝えたいことをより良く伝えるための「手段」であり、「文章技巧を使うために書く」という「目的」になってはいけない。単元を貫く言語活動を行う際には、読み取った「形式」を活用することが思考力・判断力・表現力の高まりを生み出すが、「形式」ばかりを強調しすぎてはいけない。自分の思いを大切にし、それを他者に「伝えたい」という意識に持っていく教師の支援が必要であったと考える。

参考文献

- ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』、文部科学省、2011年